

新薬創製に向けての研究開発

－横浜市地域結集型共同研究事業に参加して－

大鵬薬品工業（株）飯能研究センター

藤岡弥生、宮寺和孝、三好和久、松尾健一、江村智博、寺田忠史

大鵬薬品は、人々の健康ニーズに応えるために、1963年の創業から独創的な新薬の開発に取り組んできました。そして、こうしたなかから「ユーエフティ」や「ティーエスワン」といった新時代を画する抗がん剤を世に送り出しており、その研究開発力は国内外から高い評価を得ています。

一方、消費者向け商品におきましても、「チオビタドリンク」や「ソルマック」をはじめとし、健康の維持・増進に貢献できる製品を数多くとどけてきました。

大鵬薬品の世界的な研究開発

21世紀のニーズに応えるために大鵬薬品の研究開発は、飯能研究センター、徳島研究センター、開発センターの3つの研究開発部門、ならびに海外関連会社である Taiho pharma U.S.A.,Inc. によって遂行され、医薬品開発の段階において各々役割を果たしています。

その中で、新薬創製を担う飯能研究センターは社内創薬だけでなく、様々な研究施設との提携・協力を行っています。今回、横浜市の地域結集型共同研究事業に平成15年度より参加することで、現在新たな新薬の可能性が示唆されるデータも蓄積しつつあり、これら成果は着実に創薬へと向かいつつあります。内容に関してはまだ公開できる段階にはありませんが、近い将来、人々の健康を高め、心豊かな社会づくりに貢献できるものと考えております。



大鵬薬品本社ビル



飯能研究センター